

接頭辞 *over*-の添加に伴う統語的振る舞いの変化に関する 認知言語学的考察

—フレーム意味論の観点から—

鬼頭 修

愛知大学

osamuk@vega.aichi-u.ac.jp

1. はじめに

over は、認知言語学とりわけ認知意味論において、しばしば分析の対象として扱われてきた。(cf. Lakoff1987, Dewell1994, Tyler&Evans2001) それらの分析の多くは、*over* の多義的な意味のネットワークに関するものであった。そして、そのような *over* の多義的な側面に加えて、接頭辞の *over*-が基本動詞に添加した際に、動詞の統語的振る舞いの変化することが指摘されている(cf.Yumoto1997, Iwata2004)。本論文では、そのような統語的振る舞いの変化の中でも、特に *overthrow*, *overshoot* に観察されるような「選択制限の緩和」についてフレーム意味論の観点から分析を提示する。

2. 接頭辞 *over*-の添加に伴う統語的振る舞いの変化に関する認知言語学的考察

2.1 *over*-の添加に伴う振る舞いの変化について

Yumoto(1997)や Iwata(2004)では、*over*-の添加に伴う動詞の統語的振る舞いの変化が述べられている。その中には、(1),(2)のように、本来自動詞として振る舞う動詞が直接目的語をとるようになる「他動詞化」、またその逆の現象である「自動詞化」が挙げられている((3)-(5))。

- (1) He overcame the problem.
- (2) *He came the problem.
- (3) I ate apples.
- (4) I overate.
- (5) *? John overate apples. (Iwata2004:240)

さらに、上記のような項構造の変化に加えて、次に示すような動詞の選択制限の変化も観

察されている。(8),(9)の文例から明らかのように、どちらの文も野球の文脈における「暴投」について述べた文である。(8)では、ボールを目的語にとることによって「暴投」のイベントを表すのに対して、(9)ではベースを目的語にとることによっても同じイベントを指すことができていることがわかる。これに対して、基体動詞 *throw* では、確かに *ball* と *base* の両方を目的語にとることができるが、(6)と(7)では意味が異なってしまう。(7)は、「ベースに向かってにボールを投げる」という意味にはならず、「ベースそのものを投げた」という意味になってしまう。このような意味で、*over-*の添加は基体動詞 *throw* の選択制限に変化をもたらしたことがわかる。さらに、影山・由本(1997)によれば、*overthrow* の他にも、*overshoot* にも同じような変化が見られることが観察されている。*overshoot* の場合は、(10)に示したように、基体動詞は主に Instrument を目的語にとるのに対して、*overshoot* は、Goal を目的語にとることが観察されていることから、この点でも *throw* と *overthrow* では、直接目的語に関して選択制限が変化していることがわかる。

(6) John threw the ball.

(7) John threw the base.

(8) Yankees manager Joe Torre thought Brown *overthrew* the ball in the first inning against Texas, leaving the ball up in the strike zone.

(<http://sports.yahoo.com/mlb/recap?gid=250422110>)

(9) But Renteria was thrown out trying to advance to second after right fielder Craig Wilson *overthrew* the base and So Taguchi grounded into a double play.

(<http://sports.yahoo.com/mlb/recap?gid=240628123>)

(10) a. He shoot the gun.

b. ?He shoot the target.

(11) a. *He *overshoot* the gun.

b. He *overshoot* the target.

さらに、もう一つのケースとして、「構文交替に対する制限」の現象を挙げることができる。次の(12),(13)の文例を見ていただきたい。いわゆる「壁塗り交替」をする *load* は、(12),(13)に示したように THEME(*hay*)も LOCATION(*wagon*)も両方を目的語にとることができる。しかし、*over-*が添加されると LOCATION の意味役割を持つ名詞しか目的語にとることができないということが観察されている ((13)a, b)。

(12) a. He loaded lay onto the wagon.

b. He loaded the wagon with hay.

(13) a. *He overloaded the hay onto the wagon.

b. He overloaded the wagon with hay.

2.2 本論文が分析の対象とする現象

本論文では、紙面の都合上、全ての現象を扱うことはせず、2つ目の「選択制限の変化」の現象についての分析を示したい。本論文は、鬼頭(2006)での議論の一部に加筆・修正を施し再考したものであるが、鬼頭(2006)においては、同様の枠組みによる他の3つの現象についても議論がなされている。他の現象に関する筆者の見解・分析に関してはそちらを参照されたい。

3. 先行研究

ここでは、上で述べた *over*-の添加に伴う現象についての2つの先行研究を紹介する。一つは語彙概念意味論の観点からの分析を呈示している Yumoto(1997)、影山・由本(1997)、もう一つは構文理論の観点から分析を行っている Iwata(2004)である。

3.1 Yumoto(1997)、影山・由本(1997)

3.1.1 理論の概要

冒頭で述べたように、この二つの論文ではレイ・ジャッケンドフによって提唱された語彙概念意味論(cf. Lackendoff 1985,1990)上の概念である、語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure: LCS)を用いて分析を試みている。由本らによれば、*over*-の添加はLCSによって(14)のようにとらえることができるという。

(14) V: [...[GO([]_[Path] ... [Place X ([]_[])])]] or

[...[INCH ([BE([]_[] [Place X ([]_[])])])]]

→

over-V: [[GO([]_[Path] TO [Place OVER ([]_[])])]] or

[...[INCH ([BE([]_[] [Place OVER ([]_[])])])]]

(Yumoto1997: 189)

矢印を挟んで上が、基体動詞のLCSであり、下が*over*-添加後のLCSである。由本らによれば、LCSにおける*over*-の役割は、「OVERがPlace関数内に挿入される、もしくは置換され

ることである」と述べられている (ibid.:189)。このことから、由本らはあくまで、OVER を空間的なものと捉えていることがわかる。OVER が *heat* のような状態動詞に添加した場合、OVER の項は Property の項をとり、OVER の空間性は比喩的なものとして解釈される。しかし、*over-*の基体動詞には *sleep* のような移動動詞でも状態変化動詞でもない動詞があり、このような動詞については(15)に示す、別個の LCS を割り当てている。(15)は、「ある人(i)が寝る」というイベントが、時間の領域においてある時間を「越える」ことを示している。

(15) *oversleep*: [[Event []_i SLEEP]] GO_{Temporal} [TO [OVER []_j]] (ibid.:98)

次に上記に示した枠組みによる、*over-*の添加に伴う選択制限の絞り込みの変化に関する分析を紹介する。

3.1.2 「選択制限の変化」の現象に関する分析

この問題に対して、由本は「定項」という概念を導入することにより説明している。*overshoot* という動詞において、(16b)のように場所格を目的語にとるのは、続く(17)に示したように、GO 関数の第一項が ARROW という定項で満たされている為に、それに価する語は統語的には実現せず、代わりに場所格にあたる項が実現していると説明している。

(16) a. *He *overshoot* the gun.

b. He *overshoot* the target. (再掲)

(17) *overshoot*: [CAUSE([Thing []_i] [GO([ARROW],[Path To[Place OVER ([]_j)])]))] (影山・由本 1997:168)

3.1.3 問題点

彼らの分析の最も大きな問題点の一つは、意味論、統語論に関する「構成論」的な観点である。構成論的な観点とは、「部分の総和が全体である」という考え方である (cf. Langacker 1987:449)。*over-*の添加に関しては、彼らは、基本的に、*over-*の項が動詞に付け加わることであり、接頭辞添加によって派生した動詞 *over-V* の直接目的語が *over-*の項であると想定している。もちろん、全ての *over-V* がこれに当てはまるわけではなく、その例から外れるものに対して (ex. *overheat*, *overload*)、*定項*等の概念装置を持ち出して説明を行っているわけである。もちろん、*over-*は、もともと前置詞であり、それ故に内項をとるのだから、接頭辞の *over-*の項が、全体の *over-V* の項となると考えることに異論は無い。しかし、彼女はこのような構成論的事実 (つまり、*over-*が添加したからにはその項が統語的に実現

していなければ、つまり直接目的語として現れていなければおかしい)に固執するあまり、意味論的な事実を無視した、過剰な一般化を行っている。例えば、Yumoto(1997)によれば、(18)-(20)の例は、*over-*の項が、*over-V*の直接目的語として実現している例として挙げているが、明らかに、(19)、(20)における目的語が、*over-*の項になっているとは考えがたい。後に述べるが、*over-*が何らかの「項」を持つであろうことは、私も同意するところである。ただ、それが、統語的に実現しているとは限らず、実現のレベルが、統語、非統語レベルのものなのかという点で二つの可能性があるのであり、実際に *over-*の項が動詞 *over-V* の直接目的語であるとは限らない。その点で、実際の文脈から、何が *over-*の項になっているのかということを探査する必要がある。しかし、彼らの分析は、始めから、上で述べたような構成論的な事実の前提から始まっている故に(19),(20)のような事例に対する過剰一般化を招いていると考えられる。

(18) *overflow* the banks: 'flow over the banks'

(19) *overstay* one's welcome (cf. *stay one's welcome)

(20) *overcut* [*trees / the forests] (cf. cut trees of / in the forests) (ibid.:185)

さらに、上で紹介したように、*overshoot* の分析にあたっては、「定項」という概念により説明を行っているが、これは確かに、*overshoot* のように基体動詞と *over-V* でとる目的語の変化が交互に起こる場合(つまり、基体動詞で共起可能な目的語が *over-V* では共起できない)は、そのような説明でも説得力があるように思われるが、最初に挙げた、*overthrow* の場合、つまり *over-*の添加により選択制限の緩和が起こっている場合(言い換えれば、基体動詞では共起できなかった種類の目的語が *over-V* では共起できる)は、説明できないことになる。由本の分析に倣えば、*overthrow* の概念構造は(21)のように記述できるであろう。つまり、Theme にあたるボールは、定項で満たされているわけだから、統語的には実現しないことになる。しかし、(8)のような文は観察されており、実際は *ball* のような Theme の意味役割を持つ項も統語的に実現する。よって、*overthrow* の場合は、(21)のような概念構造では説明できないということになる。

(8) Yankees manager Joe Torre thought Brown *overthrew* the ball in the first inning against Texas, leaving the ball up in the strike zone.(再掲)

(21) [CAUSE([Thing],_i [GO([BALL],[Path To[Place OVER ([])]))])]

3.2 Iwata (2004)

3.2.1 理論の概要

Iwata (2004)では、構文理論を取り入れた *over-*の分析を提示している。ここでいう構文理論とは、Goldberg (1995) において展開されている構文文法理論である。ここで彼は *over-*の添加にまつわる現象の説明において、ダメージクラス構文、状態変化構文、そしてランドマーク構文という三つの構文を挙げている。

ダメージクラス構文は、<NP V NP>という形式に対して、“X negatively affects Y.”という意味を持つ構文である。*overload* が、そのような構文によって認可される動詞の一つである。例えば、(22)の文は、単純に、「積みすぎた」というのではなく、「(積み過ぎによって)トラックに害をもたらした」という意味であるということである。

(22) He *overloaded* the truck.

状態変化構文は、同じく<NP V NP>という形式に対して、“X causes Y to change state.”という意味を持つ構文である。Iwata はこれによって認可される代表的な動詞として、*overheat* を挙げている。そして、もう一つのランドマーク構文とは、他の二つの構文と幾つかの点で異なっている。ダメージクラス構文と状態変化構文には、「力の移動 (force-transmission)」が関係しており、そのような構文における参加者は、動作により何らかの影響を被るとされている。しかし、(23)に示すように、このランドマーク構文における参加者は、必ずしもそのような影響を被るとは限らない。そして、この構文は、他の二つの構文とは違い、特別な意味を持たない。ただ、目的語が、*over-*のイメージスキーマにおけるランドマークに対応しているというだけである。

(23) They *overfly* the territory.

Iwata によれば、これら三つの構文を用いて統語的振る舞いの諸変化に対して一貫した説明ができるかと主張している(Iwata2004:239)。

3.2.2 「選択制限の変化」の現象に関する分析

Iwata によれば *overthrow* は、ランドマーク構文によって認可される動詞である。言い換えれば、*overthrow* の直接目的語は、イメージスキーマにおいて、ランドマークとなるものでなければならない。*overthrow* における *over-*のイメージスキーマは、TR である *the ball* が、LM である *the base* の上を通り過ぎていくという関係を表したものである。それゆえに、こ

の場合の直接目的語は、ランドマークである *the base* になる。

(24) John *overthrew* [*a ball. / the base.]ⁱⁱ

3.2.3 問題点

「構文」という概念によって、LCS が持つような構成論の限界を越えようとする試みが、この分析の大きな特徴であるが、そもそも「構文」と *over-V* の関係に関する制約が全く述べられていない為に、著者の直感による分類を越えるものとはなっていない。例えば、Iwata は、*overload* はダメージクラス構文に、*overheat* は状態変化構文に、それぞれ認可されると述べている。しかし、これは *overheat* が、なぜダメージクラス構文によって認可されないのかを説明するものとなっていない。例えば、次に示す(25)から解る通り、*overheat* された部屋は、何らかの被害を被ることがわかる。この場合に、*overheat* は、ダメージクラス構文によって認可されているとは言えないのだろうか。Iwata はこの点で、何の説明も与えていない。

(25) the intense sunshine often *overheated* the room, making it uncomfortable and unused.

(www.energysmartschools.gov/sectors/sectorPages/newsdetail.asp?newsid=1925&mktd=2)

また、三つの構文の説明には大きな質的なギャップがある。そもそも、ダメージクラス構文と状態変化構文が意味的にとても限定的な構文であるのに対し、ランドマーク構文は、非常に広範であり、制約も少ない。そもそも、ランドマーク構文の認可による意味的な効果といったことが全く述べられておらず、この点でこの構文を設ける意義を見いだすことができない。

さらに、Iwata は、*overthrow* は、*base* のような Goal しか目的語にとることができないと主張しているが、既に冒頭の(8),(9)で述べたように Theme の意味役割を持つ *ball* を目的語に用いる例も実際に観察されている。この文において、*overthrow* のイメージスキーマにおけるトラジェクターが直接目的語として現れていることになり、これは Iwata の主張するランドマーク構文の条件から外れてしまうことになる。

3.3 両アプローチに見られる問題

以上、*over-*の添加に伴う振る舞いの変化に関する二つの先行研究を概観した。両者は、*over-V* に対する見方の点で対立的である。既に述べたように、由本が、あくまで *over-*の添加を基体動詞に対する *over-*の項の追加という構成論的な捉え方をしているのに対して、岩

田は、それを「構文」という一つのゲシュタルトとして捉えようとした。しかし、どちらにおいても、統語的問題において包括的な説明がなされていないことを指摘した。また、両者の分析は、選択制限の変化という現象に関しては、「それは *over-*の添加による項の追加であるから」とか、「それは構文だから」といった表面的な説明で終わっており、どのようなプロセスで、もしくは、どのような意味的な動機付け、言い換えれば認知的・概念的な動機付けにおいてそのような振る舞いをするのかということについての説明が希薄であるように思われる。

さらに、彼らのアプローチに共通する点は、どちらも動詞偏重のアプローチであるということである。確かに、既に指摘したように、由本が LCS という構成論的な分析をとる一方で、岩田は「構文」という非構成論的な分析を行っているという違いはあるが、結局は、LCS も構文も、基体動詞の意味的な貢献を偏重しているという点では、同じであると思われる。たしかに、接頭辞 *over-*は、拘束形態素であるので、添加対象である基体動詞の意味的な制約は大きいと思われる。よって、接頭辞 *over-*は、他の語（自由形態素）と同じように、多義的な振る舞いをするとは考えられない。しかし、*over-*が、特定の動詞に添加したからといって、*over-*の意味が固定されてしまうわけではない。次の(26)に示すように、*overthrow* という動詞をとってみても、(26a)と、(26b)とでは、*over-*の表す意味は異なったものである。

(26) a. The revolutionist *overthrew* the government.

b. The pitcher *overthrew* the base.

このような *over-*の意味の差は、*over-*の多義が動詞による分析だけでは不十分であることを示している。言い換えれば、*over-*の多義を包括的に捉える為には、基体動詞だけではなく、共起する主語句や目的語句との相互関係を考慮に入れる必要があることを示しており、上記のような動詞偏重のアプローチでは不十分である。

4. フレーム意味論

ここでは、本論文で用いる主要な理論装置であるフレーム意味論について概観する。

4.1 フィルモアのフレーム意味論

ここでいうフレームとは、70年代にチャールズ・フィルモアによって提唱されたフレーム意味論(frame semantics)における用語である。彼は、フレームを次のように定義している。

- (27) ひとまとまりの言語的選択肢の集合で、最も単純な場合には単語の集合であるが、文法規則や言語的カテゴリーの選択肢の集合も含まれ、各種の場面のプロトタイプ的な具現例と結びつけることのできるもの。(Fillmore1975:124, 池上嘉彦訳)
- (28) 関連する複数の要素が一つに統合された具体的な知識の型、あるいは、各要素が互いにまとまりをなすような、経験から抽出された式型。(Fillmore1985:223, 池上嘉彦訳)

意味フレームの古典的な分析として、商取引に関する動詞(*sell, buy, pay, charge*)フレームの分析がある。彼によれば、商取引のフレームは、「売り手(*seller*)」、「買い手(*buyer*)」、「お金(*money*)」、「商品(*goods*)」という四つの要素によって構成され、これらの要素がどのように統語的に実現するかにより、*sell, buy, pay, charge* といった四つの動詞の意味的な違いを説明できるということである。例えば、*sell* という動詞は、主語／直接目的語が、それぞれ「売り手」／「商品」といったカテゴリーに属する語によって満たされた時に用いられ、*pay* という動詞の場合は、「買い手」／「お金」によって満たされた場合であるということができる。ここで重要なのは、それら四つの要素によって構成される単一のフレームによって、四つの動詞の意味的な違いを捉えることができるということであり、同時に、それらの動詞は、そのような意味フレームが喚起されることによって理解されるということである。

フレームを喚起するのは動詞だけではない。名詞の理解にもフレームが大きく関わっているのは多くの事例から明らかである。Fillmore(1982)によれば、*land, ground* という二つの名詞は、共に同じ物を指す場合があるが、喚起するフレームが異なるという。*land* の場合は、「海(*sea*)に対する陸(*land*)」というフレームの中で理解され、*ground* の場合は、「空(*air*)に対する地上(*ground*)」というフレームの中で理解されるという(Fillmore1982: 121)。

よってこのように、語の意味はフレームによって構造化され、語は特定のフレームを喚起(*evoke*)するということがわかる(*ibid.*:117)。上記のようなフィルモア流のフレーム意味論は、近年、カリフォルニア大バークリー校を中心に行われているフレームによる辞書編纂プロジェクトであるフレームネット(FrameNet) (cf. Fontenelle, ed.2003)の理論的基盤となっている。しかし、フレーム意味論並びにフレームネットにおいては、フレーム喚起によって語の曖昧性解消がどのように行われているのかは明示的に説明されていない。黒田・中本(2005)は、このフィルモアのフレームネットをさらに発展させ独自の定義を行っており、フレームの喚起によってどのように語の曖昧性が解消されるのかを説明している。

4.2 黒田・中本(2005)におけるフレーム意味論

黒田・中本(2005)は、フレームⁱⁱⁱの特定に関して、次のような独自の議論を展開している。

語は、品詞に関わらず様々なフレームを喚起するが、決して一つの語が一つのフレームを喚起するわけではなく、複数の異なったフレームを喚起するのが一般的である。そして、黒田らによれば、「どんな語も単独では意味フレームを特定する力は無い」ということであり、そのような場合、「両立しないフレーム群が競合」しており、『この競合は「最適者の勝ち残り」方式で解消される』と考え、フレームの特定が並列分散的であることを指摘している(ibid.:12)。そして、このようなフレームの特定によって、語義の曖昧性が解消されるとしている。黒田によれば、このような勝ち残りによる特定は、次のように定式化できるといふ^{iv}。

(29) $s = w_1 + w_2 + \dots + w_n$ ($W = \{w_1, w_2, \dots, w_n\}$) とするとき、 W のおのおのの要素によって喚起されるフレーム群の全体 F^* の競合によって決定される部分フレーム群 F とすると、

- [1] F^* が、その真部分集合である F に収束することを、 W によって喚起されたフレーム F^* に対する相互選択と呼び
- [2] 文 s の解釈 $M(s)$ が F が規定する意味 $M(F)$ に一致することが、文意のフレーム F への引き込み効果と呼ぶ。

これを簡単な例で考えてみる。(30),(31)の例文に注意されたい。二つの文は、「 A が銀行を襲う」という文であり、 A の部分に何が入るかによって異なっている。

(30) 強盗が銀行を襲った。

(31) 暴走したトラックが銀行を襲った。

まず、(30)の文を見ると、まず、各語、「強盗」、「銀行」、「襲う」、「が、を」には、特定のフレームが結びついている。しかし、各語単独によって喚起されるフレームは非常に多くあり、その喚起における活性化の強度は、品詞によっても異なる。例えば、「強盗」という語が喚起するフレームは、文字通りの「強盗フレーム（ある行為主体が、別の参与者の物品を強奪する）」や、「逃走フレーム（強奪した物品を持って逃げ去る）」などいくつか考えられる。つまり、「強盗」一語だけでは、これら複数のフレームが競合している状態なのである。これが、「襲う」という語と共起することによって（これを語同士の「取り合わせ」という）、喚起されるフレームは一気に収束し、最終的には、「銀行」との相互選択により、「強盗が銀行に押し入り、銀行員を襲い、金品を強奪する」という文意を得ることが

できる。このように、「強盗」という語がたどったような複数のフレームの収束のプロセスを、「相互選択」とよび、選択の結果として上のような文意が得られることをフレームへの「引き込み」という。これで、(31)のように主語が「暴走したトラック」に変わることによって、「相互選択」のプロセスも大きく変わってしまうことがわかる。さらに、「銀行」という語の点から考えると、(30)の場合は、「引き込み」によって「銀行」が「銀行員」として解釈されるのに対して、(31)の場合は、「建物」として解釈されるということがわかる。このことから、(29)で示されているフレーム間の「相互選択」や、フレームへの「引き込み」は、いわゆる文脈効果、もしくは、ラネカーの提唱する意味調節(semantic accommodation) (Langacker 1987: 76)の具体的なプロセスの内実を示すものであるということがわかる。

4.3 本アプローチにおける取り組み

本稿では、接頭辞 *over-* の分析に関しても、上で示したような意味フレームの知見を取り入れて分析を行う。まずは、本アプローチにおけるフレーム相互選択の理想モデルを示す。次ページの図1を参照していただきたい。丈夫の上部の、*X, V, over-, Y* (*V*は動詞、*X, Y*は任意の名詞句を指す)と書かれたボックスが実際の言語表現(Langackerの用語でいうならば音韻極)になる。そして、その下に、長方形の中にある丸四角が、各語と結びついているフレームである。複数のフレームが書かれているが、これは語が一語の段階で複数のフレームが競合している様子を表している。これら、各語のフレームが、*X, V, over-, Y*という語同士の取り合わせにより、文意を得るためのフレームが決定される。太線で囲まれているフレームが最終的に勝ち残ったフレームである。勝ち残りに際して、相互選択のプロセスが、点線で表されている。この場合は、*X*のフレーム(ここでは仮に*h*とする)と基体動詞のフレーム(*h*)が一致し、また*X*の別のフレーム(*d*)が*Y*のフレームと一致している。そして、それらのフレームと *over-*のフレームが部分的に一致している。ここに書いたのは、あくまでモデル図であって、実際の相互選択のプロセスは、もっと複雑であり、もっと多くのフレームが関わっていると考えられる。この図により強調したいのは、各語は、関係する全てのフレームに直接関係しているわけではなく、それぞれが部分的に家族的類似関係にあることによって結果的に相互関係にあるということである。言い換えれば、本モデルは、いわゆる語と語の相互作用の内実をスキーマティックに表現したものであるといえよう。

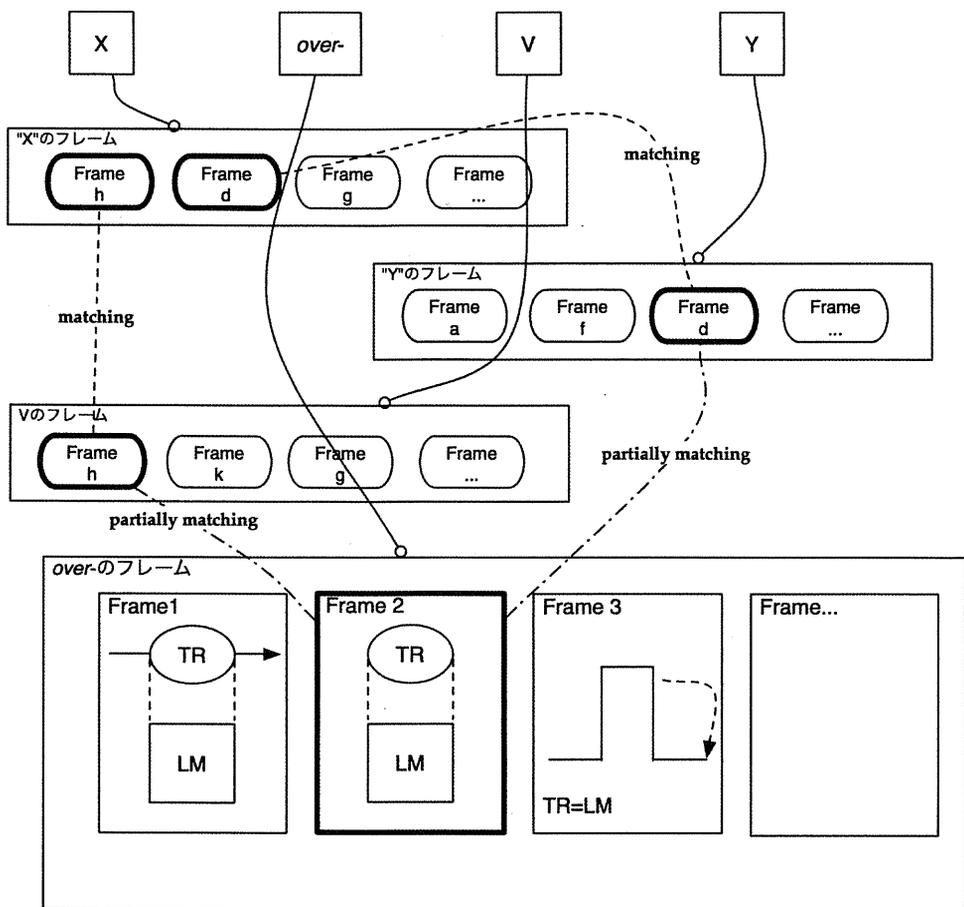


図1. "X over-V Y"におけるフレーム相互選択モデル

5. *over-*の添加に伴う選択制限の変化に関する考察

5.1 *overthrow* に関する考察

本節では、4.3節で提示した枠組みに基づいて、*over-*の添加に伴う振る舞いの変化に関する分析を行っていきたい。

すでに述べたように、*overthrow* は、基本動詞 *throw* が、Theme(ex.ball)しか直接目的語にとれないのに対して、Goal も Theme 両方を直接目的語にとることができるということであった。まずは、"He overthrew the base."という文を理解する上で関係していると考えられるフレームの関係を次ページの図2に示す。

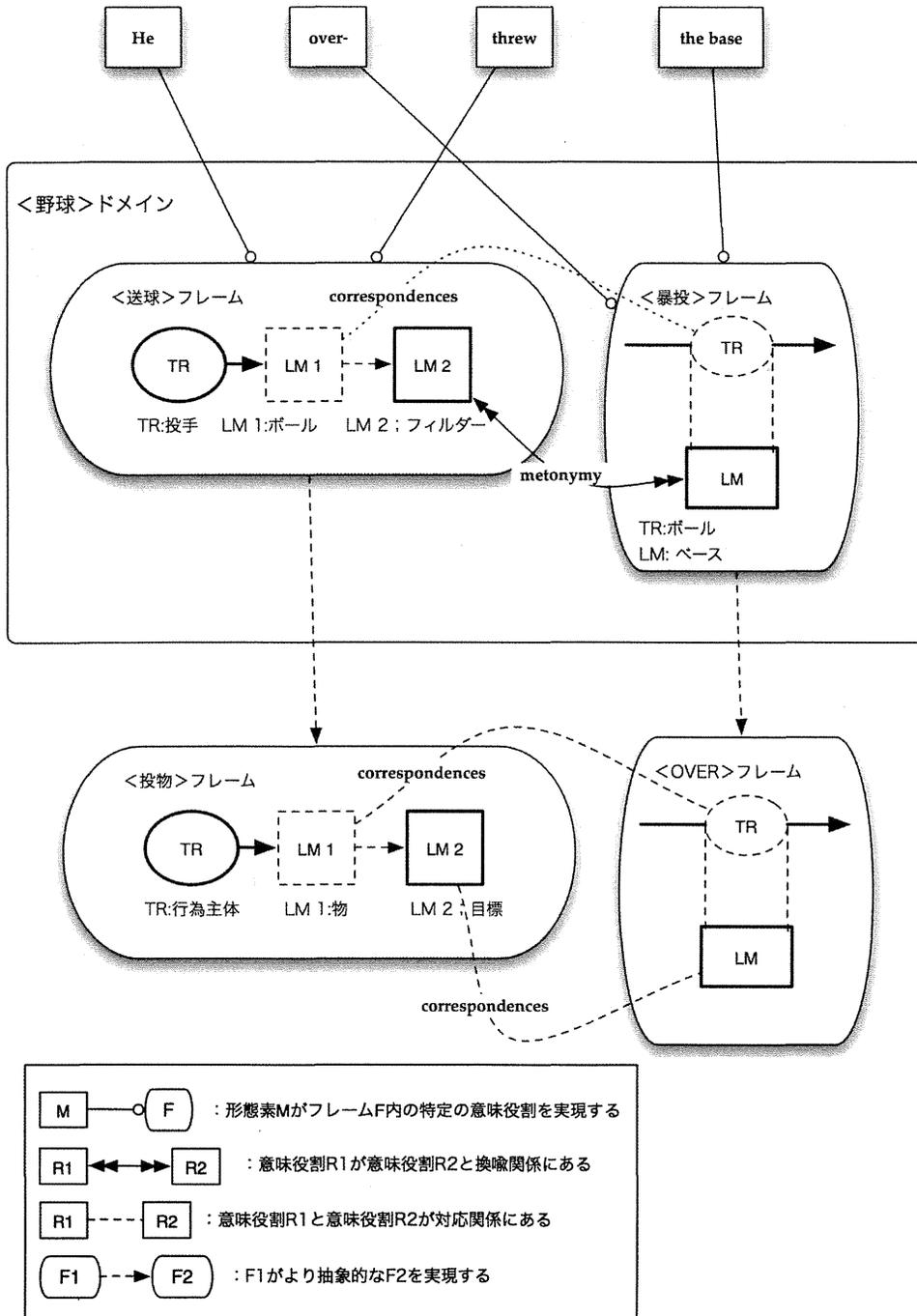


図2 "He overthrew the base"に見られるフレーム関係

表記に関してであるが、各矢印や点線がどんな関係を指すのかは下の対応表を参考にさせていただきたい。また、いくつかの点で筆者独自の表記法があるためここで説明を付す。

- ・ 特定の形態素が特定の意味役割を実現している場合、その要素は太線で表される。例えば図2を見ると、[He, threw]は、「送球フレーム」を喚起しているがその中で、[He]は、「送球フレーム」内における投手(TR)を、[threw]は、投手(TR)からボール(LM)への矢印を実現している^{vi}。尚、図2のような表記では、形態素のボックスが単にフレームにつながれているだけだが、これはその形態素が実現する意味役割が任意であるということではない。本当は、個々の形態素を個々の意味役割と個別に結ぶことが望ましいが、線が交錯し見にくい図になってしまうことを避けるためにこのような表記法をとった。
- ・ 同時に、太線で表されている部分は統語的に実現されていることを指し、波線はそうではないことを指す。さらに重要なこととして、波線部分で表される意味役割・関係は、統語的には実現されていなくても概念的には顕現している(conceptually present)ことを暗示する。これは、Langackerのベース・プロフィール関係とほぼ等しいものであると考えてよい。(Langacker1987: 183)
- ・ 各フレーム内の意味役割の関係を表すに際して、Langackerのピリヤードモデル(Langacker1991: 217)におけるエナジーフローの図を援用したのは、over-のようなよりスキーマティックなフレーム^{vii}との関係を示す際に有用であると考えたからである。
- ・ ここでいうドメインとは、複数のフレームを内包する概念体であるとする。

さて、上記の注意点をふまえた上で、図からどんなことが言えるのかについて述べる。まず、この文を解釈する上で、もっとも重要なのが、「野球ドメイン」であろう。このドメインの喚起に関係するのは、*threw* という動詞だけではない、基体動詞 *threw* と *base* といった名詞句との取り合わせに加えて、その前の文脈も関係している^{viii}と言えるであろう。もし、これが夫婦喧嘩の文脈であれば関係するフレーム・ドメインは異なる物となったであろう。そして、このような「野球ドメイン」の中で、動詞 *threw* は「送球フレーム」を喚起し、over-のスキーマはボールがベースの上を通り越すといった「暴投フレーム」と一致する。ここで重要なのは、「送球フレーム」においては、直接的には *the base* は関係していないということである。図から明らかなように、*the base* 自体は、「暴投フレーム」内のベース(LM)を実現する。このベースとはすなわち、「送球フレーム」内のフィルダー(LM2)のことであり、この二つはメトニミーの関係にある。結果的に、「暴投が起こる」ということは「投手(も

しくはフィルダー)の投げた球がベースを守るフィルダーの上を通り過ぎた」ということとして理解され、文意が得られると考えられる。それでは、直接目的語が *the ball* になった場合はどのようなフレーム関係を得ることができるのであろうか? 次の図3を見ていただきたい。

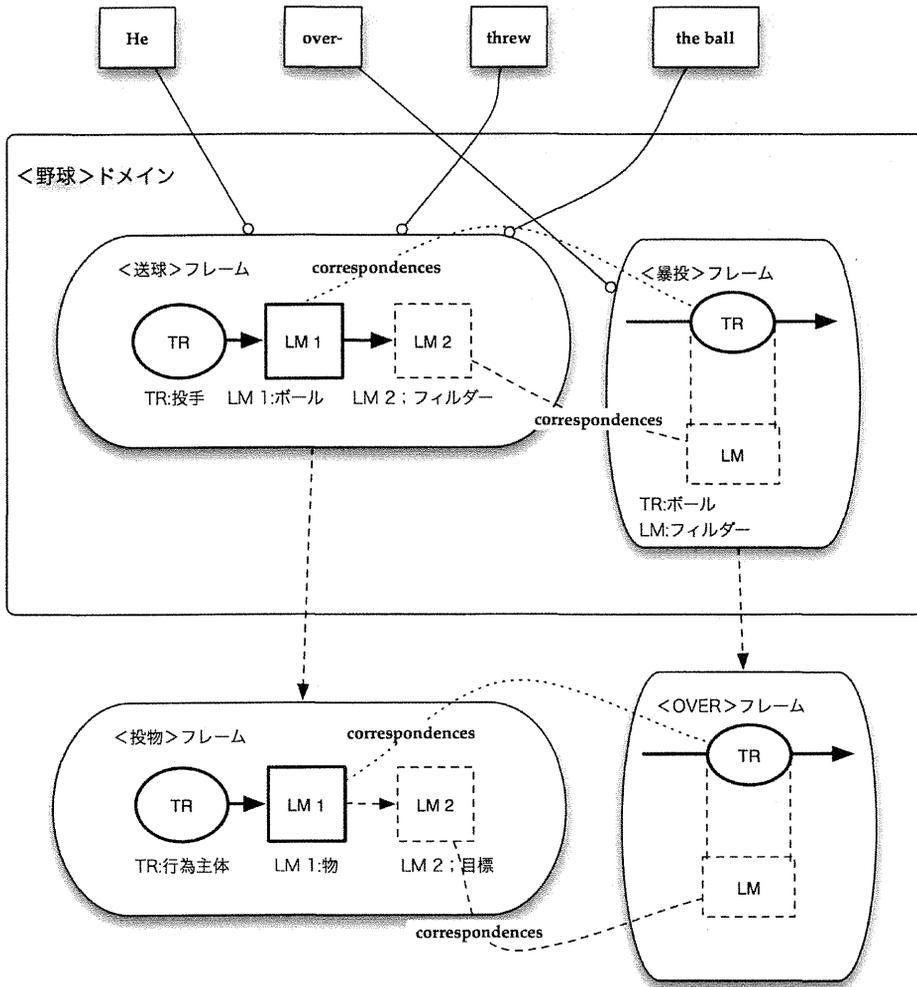


図3 "He overthrew the ball"に見られるフレーム関係

まず、「送球フレーム」内において実現されているのが LM2 ではなく、Theme の LM1 であることから図3は図2の図と地を反転させたものとも考えるかもしれないが、この図はそれ以上のことを示唆している。図2では、「送球フレーム」の喚起に関するのは主語(*he*)

と基体動詞だけであったのに対し、今回は、直接目的語である *ball* も関係していることがわかる。これは筆者の直観の域を出ないが、単純に 1) [*he, threw, base*]と 2) [*he, threw, ball*]という語群を見た際に、共に「野球」を連想するのは確かだが、「送球」を連想する確率が高いのは明らかに後者ではないだろうか[※]。そのような考えたとき、「送球フレーム」の喚起に、*ball* が関係していると考えるのは妥当であると思われる。よって、目的語が *base* であるのか、*ball* であるのかの違いは、フレームの喚起のプロセスの違いとして捉えることができると思われる。いいかえれば、このことは文理解のプロセスの違いでもありと考えられる。この点は、心理実験による実証が必要であろう。

ここまでで、“*He overthrew the base.*”と“*He overthrew the ball.*”という二つの文におけるフレーム関係の違いについて考えた。さて、そもそも問題としてきたのは、基体動詞が *base* のような目的語をとれないのに対して、*overthrow* がとれるのはなぜかということであった。そこで、今度は、“*He threw the ball.*”という文におけるフレームの関係を考えねばならない。

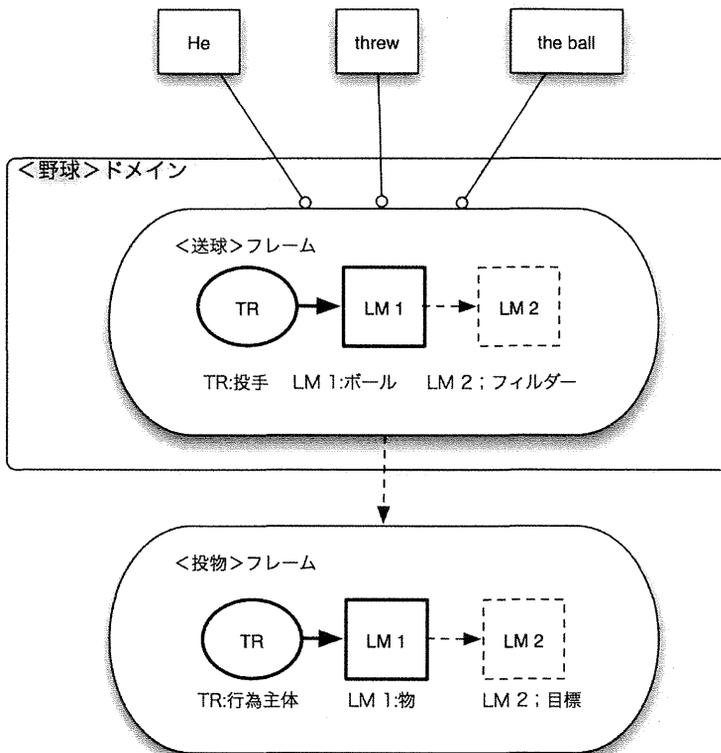


図4 "He threw the ball."に見られるフレーム関係

図2,3と比べて特に新しい部分があるわけではないが、言うなればこの文が喚起するのはあくまで「投物フレーム」そしてその具体例である「送球フレーム」である。ここで、あらためて接頭辞 *over-* が果たす役割を確認できる。*over-* は、「野球ドメイン」内において、「暴投フレーム」を喚起することに関係していた。言い換えれば、*over-* が本来単独で潜在的に持つフレーム(「TRがLM上を通り過ぎる」と野球ドメイン内の「暴投フレーム」が一致したということであった。そして、その「暴投フレーム」内のLM(通過されるモノ)を *base* という形態素が実現していたのが図2であった。言い換えれば、概念レベルでは *base* は *over-* の目的語であると言える。つまり、“*He overthrew the base.*”のような文では、統語的には *overthrew* の目的語であるが、概念的には *over-* の目的語であるという^x、ズレが生じていると言えよう。このようなズレが生じる理由は、*overthrow* という動詞が表すイベントが単一ではなく複数だからである。言うまでもなく、“*X overthrow Y(Goal)*”という文は、野球の文脈では「Xが球を投げる。」というイベントと、「Xの投げた球がY上空を通り過ぎる。」というイベントを含意している。前者のイベントに関しては基体動詞 *throw* が支配的な役割を果たし、後者に関しては接頭辞 *over-* が支配的であることは図2から明らかである^{xi}。

さて、*throw* だけの場合、基本的に関係するフレームが「送球フレーム」だけということから明らかのように、*throw* が含意するのは前者のイベントのみである。よってあくまで、*throw* は統語レベル、概念レベルともに Theme しか直接目的語にとることはできない。もちろん、(32)のように、前置詞句により Goal を明示することはできるし、(33)のように与格構文において Recipient を間接目的語にとることはできるが^{xii}、(34)のように Goal をとることはできない。

(32) He threw to the second base.

(33) I threw him a ball.

(34)? I threw the second base a ball.

以上の理由から、*overthrow* と基体動詞 *throw* では、共起できる目的語に関して違いがあるということがわかる。

6. 今後の展望

今回は、フレーム理論を用いた分析を *overthrow* の振る舞いを一例に行い、語の理解さらに文の理解においてフレームという言語外知識がいかに重層的・多層的に関係しているのかについての見解を示した。しかしながら、この分析は実証研究がなされていない。心理実験を行い“*X over-V Y*”の理解においてどのようなフレームが関係しているのかを実証的

に示す必要がある。今後の課題としたい。また、*over-*の添加に伴う他の様々な現象 (ex.他動詞化、自動詞化、構文交替の制限など) にも同様の枠組みでさらに発展的な分析を行っていききたい。

ⁱ この「定項」とは、Jackendoff(1985)における lexicalization、もしくは Jackendoff(1990)における incorporation と、同等のものであると考えられる。例えば、*butter* という動詞であれば、LCS のレベルで、GO 関数の Thing 項が既に BUTTER という定項によって満たされている為に、直接目的語が ON の項になり、それゆえに、(1)に示す通り、“*He buttered the bread.*” という表現が可能になると説明している。

(1) *butter*:

[Event CAUSE ([Thing x], [Event GO ([Event GO [Thing BUTTER], [Path TO ([Place ON([Thing y])])])])])])]
(Jackendoff1985:184)

ⁱⁱ Iwata(2004)では、*overthrow* が、*the ball* を直接目的語にとる文を、非文と判断しているが、後節で指摘するように、実際には、ウェブでは *the ball* を目的語にとる文が散見された。

ⁱⁱⁱ ここで述べられているフレームという概念は、3.2.1 節で紹介したフィルモア流のフレームの定義とは、若干異なっている。ここで使われているフレームという概念は、黒田によれば、「状況レベル」のフレームのことである。「状況」とは、「第一義的にある時空に繰り返し現れる存在の意味特徴のあいだの共変動を捉える一般化であり、第二義的に、その一般化に基づく概念化のパターン」(黒田・中本・野澤 2005:144) であると定義している。そして、意味フレームに関して、次のような定義を行っている。

(1) i. 意味フレームはヒトの(状況)理解の単位である; すなわち、ヒトが区別可能な状況の一つ一つをコードしている非言語的な単位の一つである。

ii. 意味フレームは、状況の理想化であり、その内容は(典型的には) <<何が>、<いつ>、<どこで>、<何のために>、...、<何を>、<どうする>>という形式で記述できる。

iii. 意味フレームは有限個しか存在しない。意味フレームの集合が、ヒトが理解できる状況の全体を定義する。
(黒田・中本 2005: 3)

^{iv} (6)に示した定式化は、黒田本人とのメールによるパーソナルコミュニケーションによる。尚、(6)中の強調は筆者による。

^v さらに言えば、ここで示した「銀行」のような多義的振る舞いは、Croft&Cruse(2004)において指摘されている、*facet* (Croft&Cruse2004:116) であると考えられるが、相互選択のプロセスは、そのような *facet* が、どのような環境で実現するに至るのかということについて

説明しているといえる。

vi 当然、*threw* が実現するのは、「関係」であって「意味役割」ではない。黒田は、この点で、動詞はフレーム内の意味役割ではなく、フレームそのものを実現するものとしてフレームそのものと結びつけるという表記法をとっているが、筆者はあえて動詞が「フレーム内の意味役割を満たす要素同士の関係を実現する」といったスタンスをとる。

vii *over-*のスキーマのような抽象的な知識をフレームとして扱うかどうか議論の余地のあるところである。黒田も、フレームに抽象度の違いがあることは認めている。本稿では、*over-*のスキーマも一つのフレームとして扱うことにする。

viii ドメインの喚起において文脈は不可欠であるが、本枠組みにおいてそれを表記することはしていない。どのようにフレームの記述に導入するのは今後の課題とする。

ix もちろんこのことは、2)が、主述の関係になっている(*He threw a ball.*)のに対して、1)は、「野球」というコンテキストが主述の読みをブロックする(野球の文脈で *He threw a base.* というイベントはありえない。)ことも大きな要因である。ただ、このことを実証するためには心理実験をして検証する必要があり、今後の課題である。

x *over-*のような形態素が「目的語」を持つという表現は、いささか奇異に思われるかもしれない。しかし、Kuroda(2000)において提唱されている「複数パターン統合式の統語解析 (Pattern Matching Analysis)」の観点に立てば極めて自然であると思われる。PMAの詳しい説明については、上記の論文を参照されたい。

xi さらに、この二つのイベント(フレーム)は、部分的に関係しており、両者はつながっていることも忘れてはならない。

xii 逆に、*overthrew* は、“*He overthrew him a ball.*”という与格構文はとることができない。これは、*overthrow*、特に *over-*の喚起するフレームを考えれば明らかである。さらに、この事実は、与格構文においては、間接目的語(ex. *Joyce*)が直接目的語(ex. *walrus*)を所有することがプロファイルされているというラネカーの分析(Langacker1987:110)が妥当であることを証明している。

参考文献

<著書、論文>

Barlow, Michael and Susan Kemmer. (eds.) 2000. *Usage-based models of language*. Stanford, Calif.: CSLI Publications.

Brugman, Claudia. 1981/1988. *The story of over: polysemy, semantics, and the structure of the lexicon*. New York: Garland.

-
- Cruse, Alan D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Croft, William and D. Alan. Cruse 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Dewell, Robert. B. 1994. "Over again: Image-schema transformations in semantic analysis." *Cognitive Linguistics*. 5(4): 351-381.
- Fillmore, Charles. 1975. "An alternative to checklist theories of meaning." *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Fillmore, Charles. 1982. "Frame Semantics." In: The Linguistics Society of Korea. (ed.) *Linguistics in The Morning Calm Selected Papers from SICOL-1981*. 111-137. Seoul: Hanshin Publishing Company.
- Fillmore, Charles. 1985. "Frames and the semantics of understanding." *Quanderni Semantica*. 6(2): 222-254.
- Fillmore, Charles and B.T. Atkins. 1992. "Toward a frame-based lexicon: The semantics of RISK and its neighbors." In: Adrienne Lehrer and Eva Kittay. (eds.) *Frames, fields, and contrasts*. 75-102. Hillsdale/N.J.: Lawrence Erlbaum Assoc.
- Fontenelle, Thierry. (ed.) 2003. *International Journal of Lexicography – Special Issue, FrameNet and Frame Semantics*. 16 (5). Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: a constructional approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Iwata, Seizi. 2004. "Over-prefixiation: a lexical constructional approach." *English Language and Linguistics*. 8(2): 239-292.
- Jackendoff, Ray. 1985. *Semantics and cognition*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic structures*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Kuroda, Kow. 1999. "Outlining the Pattern Matching Analysis: A theoretical framework proposed for a realistic description of natural language syntax." *Papers in Linguistic Science*. 5: 1-31. Department of Linguistics Science, Kyoto University.
- Kuroda, Kow. 2000. *Foundations of Pattern Matching Analysis: A New Method Proposed for the Cognitively Realistic Description of Natural Language Syntax*. Ph.D. diss. Kyoto University.
- Kuroda, Kow. 2001. "Presenting the "Pattern Matching Analysis," A framework proposed for the realistic description of natural language syntax." *Journal of English Linguistic Society* 17: 71-80.

- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: what categories reveal about mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald.W. 1991. *Concept, image, and symbol: the cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald.W. 1993. "Reference-point Constructions." *Cognitive Linguistics*. 4(1): 1-38.
- Langendoen, D.T. 1970. *Essentials of English Grammar*. New York: Holt, Rinehart, and Winston.
- Quirk, Randolph., Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of The English Language*. London: Longman.
- Rice, Sally.A. 1987. *Toward a Cognitive Model of Transitivity*. Ph.D. diss. University of California, San Diego.
- Sugioka, Yoko. 1985. *Interaction of derivational morphology and syntax in Japanese and English*. New York: Garland.
- Sweetser, Eve E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Tyler, Andrea. and Vyvyan Evans. 2001. "Reconsidering prepositional polysemy networks: the case of over." *Language*. 77: 724-65.
- Ungerer, F. and H.J. Schmid. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Essex: Longman.
[池上嘉彦他訳.(1998) 『認知言語学入門』東京: 大修館書店]
- Yamada, Shoichi. 2000. "A semantic study of the prefix over- and the norm of evaluation." *Tsukuba English Studies*. 19: 65-80.
- Yumoto, Yoko. 1997. "Verbal prefixiation on the level of semantic structure." In: Kageyama, T. (ed.) *Verb semantics and syntactic structure*. 177-204. Tokyo: くろしお出版.
- 影山太郎・由本陽子 1997. 「語形成と概念構造」中右実(編)『日英語比較選書8』東京: 研究社.
- 鬼頭修 2006. 『接頭辞 over-の多義に関する認知的アプローチ』京都大学大学院人間環境学研究所修士論文.
- 黒田航 2005. 『日本語の Pattern Matching Analysis (PMA)の簡単な実例-"x が y を襲う"の分析を一例にして並列分散意味論 (PDS) の基礎を解説する-』未刊行論文(以下のウ

ウェブサイト入手可能: csl.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers.html)

黒田航・中本敬子 2005. 『階層的意味フレームは分析はネットワーク分析を越える 意味フレームに基づく言語分析／概念分析の理論と実践』未刊行論文 (以下のウェブサイト入手可能: csl.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers.html)

黒田航・中本敬子・野澤元 2005. 「意味フレームに基づく概念分析の理論と実践」山梨正明 (編) 『認知言語学論考 No.4』133-269. 東京: ひつじ書房.

中本敬子・黒田航・野澤元・龍岡昌弘・金丸敏幸 2005. 『FOCAL/PDS 入門 フレーム指向語彙概念分析／並列分散意味論の具体的な紹介』未刊行論文 (以下のウェブサイト入手可能: csl.hi.h.kyotou.ac.jp/~kkuroda/papers.html)

山田祥一 2001. 「接頭辞 *over*-の空間的用法と程度的意味に関する一考察」中右実教授選歴記念論文集編集委員会 (編) 『意味と形のインターフェイス (上)』231-239. 東京: くろしお出版.

山梨正明 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

<辞書類>

Cowie, A.P. et al.(eds.) 1948. *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 4th edition. Oxford: Oxford University Press.

寺澤芳雄 (編) 2002. 『英語学要語辞典』東京: 研究社